

寺
生
ま
れ
の
勤
く
ん

太陽系第三惑星地球。

地球と言っても『ちきゅう』と読んではいけない。地球は『ちたま』と呼ばれる星で、地球が浮いている銀河系の双子銀河にある双子星である。

第一章 光の指輪

俺の名前は寺原勤。てらはらつとむとあるお寺の三男坊として生まれた。

俺の父さんは住職な訳なんだけれども、その父さんに小さい頃から何度も言われている事がある。

「いいかい、もし見えてはならない物が見えても他の人に迂闊に話してはいけないよ。」

でも、その見えてはならない物が害をなそうとしたら立ち向かうんだ」

初めのうちは『見えてはいけない物』と言うのが一体何なのか解らなかった。

けれども、小学校に上がってから父さんの言っていた事が何となく解った。

『見えてはいけない物』と言うのは、所謂『お化け』の事なんだと。

父さんに色々教わって、俺は悪いお化けのような物を何とかする方法を覚えた。

その方法は、退治する物だったり浄化する物だったり、色々だ。

三男坊と言う事で寺を継ぐ必要は無い俺だったが、どうやら兄弟の

中で靈感が一番強いのが俺らしく、お祓いの時に使う札を書くのは俺の役目だった。

そんな俺が高校に入り、これから高校生活をエンジョイするぞと言う時に、あるクラスメイトが目にとまった。

背が低く、いつも物憂げに本を読んでいる男子生徒。

その特徴だけを見るのなら別段気にする必要は無いのだが、俺が気にした理由は彼の左手に有った。

彼の左手の中指に、煌めく光の指輪が填まっているのだ。

この学校は勿論、指輪などのアクセサリーの着用は校則違反になる。しかし、彼の指に填まっている指輪は特に何も言われる事はないだろう。

彼の指輪は、他の人には見えない特別な物だから。

あの指輪を気にしたのがきっかけで、俺はあの彼、柏原^{かしわら}カナメに話しかけるようになった。

何となくあの指輪は一体何を意味している物なのか知りたかったのだ。

初めて話しかけた時、彼はおどおどした様子を見せたけれど、今では昼休みに一緒にお弁当を食べる仲までにはなった。

「カナメ、まだ部活とか入ってないみたいだけどこのまま帰宅部続けるのか？」

「え？　ちょっと前に漫研に入ったよ。」

でも、それ言ったら勤も帰宅部じゃん」

「そうなんだけどさ。」

俺は帰宅部のままバイトでも探そうかなって」

たわいのない話をしながら過ぎていく時間。

カナメには言えないなあ、本当はバイトを探すつもりなんじゃなくて、日々お祓いの仕事を家に帰るなりしてるなんて。

でも、カナメは意外とスピリチュアルな物が好きなようで、偶にタロット占いの本なんかも読んでいる。

流石にカードの意味は覚え切れていないらしく、占いをする時は本を見ながらなのだけれど、少し前に試しに占って貰ったらかなかの的中率だった。

的中率、と言ってもまだ結果が出る程未来に進んでいないのだけれど、過去の事はかなり言い当てられてしまった。

驚く俺にカナメは、こう言う占いは誘導尋問的な所もあるから。と笑っていたけれども、それにしてもなかなかの腕前だ。

そんな感じで占いの上手いカナメの事だ。背は低い物の、優しく、それなりに整った顔立ちも後押ししてか、占い好きの女子達から囲まれている所も偶に見掛ける。

いつでもタロットカードを持ってきている訳では無いので要望に応じていない事も多いと言っているが、実の所はわざとカードを持ってくる。占いというのは結構神経を使うようで、何人か立て続けに占った後、ヘロヘロになっている所を見た事があるからだ。

お弁当を食べ終わった俺とカナメは弁当箱をしまつて一緒の机を囲んで話をしている訳なのだが、カナメはずっと手元に視線を向けている。

元々人と視線を合わせるのが苦手と言っているのだが、今は別の理由だ。

毛糸を靴の中から引っ張りつつ、編み針で毛糸を編んでいる。

最近のカナメのマイブーム、編みぐるみを作っているのだ。

カナメが視線を手元に落としているのを良い事に、俺はカナメの左

手をじっくりと観察する。

あの光の指輪の変化を見ているのだ。

光の指輪は、時折輝き方が変わる。

落ち込んでいる時に輝きが弱くなったり、他にも突然輝きが増したりするのだ。

輝きが増している時は機嫌の良い時か調子の良い時なのだろうかと思つて居たのだが、どうにも違う様子。

体調が悪い時でも強く煌めいている事があるのだ。

不思議に思つて暫く観察した結果解つたのは、カナメが何かを作っている時に、輝きが増すと言う事。

一体何なんだろうなあ……

「そう言えば勤。」

最近家の手伝い忙しいの？」

考え事をして少し上の空になっていた所にそう訊ねられて、一瞬間葉に詰まる。

不思議そうに俺の事を見てるカナメに、俺は笑つて答えた。

「あゝ、結構父さんのスケジュール管理とか、あと、お祓いに来た人のおもてなしの手伝いとか色々有るな」

「そうなんだ。」

お寺さんなんてお墓参りの時と法事の時しか行かないから何やってるのか解らないんだよね。

お祓いもやってるんだ」

「ほら、厄払いって有るじゃん。あれよ」

俺が自分のお寺の業務の話をすると、カナメは意外といった顔をしないで聴いている。

どうやらお経を上げたり修行をしているイメージが強かったようだ。まあ、日本国の国民は宗教に対する執着が薄いから、自分が属する宗派の事でも余り知らない人が大多数だろう。

そんな話をしている内にも時計の針は進み、予鈴が鳴る。

カナメが編みかけの編みぐるみをしまっている間に、俺は自分の席へと戻っていった。

その日の授業も終わり放課後になった。

いつもは放課後すぐにカナメと一緒に学校を出る。

俺がバス通学でカナメは自転車通学なのでバス停まで一緒に行き、そこで別れるのだ。

しかし、今日はカナメが放課後用事があると言って学校に残っている。何かと思ったら、漫研の会誌に載せる原稿の締め切りなのだという。

「え？　もしかして出来上がってないのか？」

俺の問いにカナメはきょとんとして答える。

「出来上がってるから後はすぐ会長に渡せるよ」

それなら、渡してすぐに帰れるなと言うと、今度はこう返ってくる。「その後会長がすぐに編集して印刷から製本まで流れるように作業があるらしくって、僕も手伝わなきゃいけないんだ。だから、勤は先に帰っててよ」

なる程、そう言う事か。

俺と違って部活に所属しているとすると、普通はこう言った事が有るのが当たり前だ。

俺の学校の漫研は部室という物が無く、皆原稿は家で描いていると言う事で、普段は特に拘束時間が無いらしい。

ふと、カナメが描いた原稿が気になった。

「カナメってどんなの描いてるんだ？」

折角だから見せてくれよ」

「え？　僕が書いてるのは小説だけど、それでも良ければ」

漫研なのに小説を持っていくとか、結構肝が据わってるな。

そんな事を思いつつ原稿を受け取ると、文章に目を通す前から何か違和感を感じた。

実際に存在する紙の質量よりも、何か大きな物を感じたのだ。

インクか？ それとも見た感じ挿し絵も入っているし、スクリーントインの分重いのか？

存在以上の質量を感じる理由がわからないまま、ざっくりと目を通してカナメに原稿を返す。

「もう読み終わっちゃった？」

「いや、ざっくり見ただけ。」

会誌になって各クラスに配布されたらまたじっくり読むよ」

「そう？ 他の人も原稿頑張ってるから、会誌楽しみにしててくれると嬉しいな」

そう照れたように笑うカナメの左手では、光の指輪が眩しい程に輝いていた。

第二章 退魔師

ゴールデンウィークの真っ只中、俺は学校の休み中でもなかなか一日を使つて遊ぶと言う事が出来ていなかった。

理由は簡単。学校が休みの内に、寺に來た除霊依頼を受けているのだ。今日もとあるお宅にお邪魔して、邪気を払う鈴を鳴らしている。

リンリンと音が鳴ると、家の中の隙間という隙間から何者かが覗き込んでくる。

目を見開き、隙間に潜むそいつ等は『スキマ』と言う、名前通り隙間に居座る霊だ。

基本的に覗いているだけで害はない事が多いのだが、この家のスキマは嫉妬、恨み、その他様々な怨念に影響を受けてしまい、家の住人に害をなす様になってしまっていた。

鈴の音を鳴らし続けると、スキマ達が威嚇の声を上げ一丸となって飛びかかってくる。

しかしこう言う状況も慣れた物。俺は反対側の手に持っていた水晶の結晶をスキマ達に向け、念を込める。

「破ァー！」

掛け声と共に水晶の結晶から光が放たれる。

その光を浴びたスキマ達は、瞬く間に消えていった。

スキマの対応を済ませた俺は、家主に除霊完了の報告をする。

そして、今後この様な事が無いようにどうしたら良いかと訊いてくる家主にこう伝えた。

「この家と、あなたには様々な怨念が向けられています。

事前にお話を聞いた限りですと、随分とあくどい事をなさっているようですね。」

今後はそのような事は慎み、人の為になる事をしていけば、自ずと幸福が訪れてくるでしょう」

俺のこの言葉に家主は納得がいかなかったと言った顔をするが、取りあえず今回の除霊料は払って貰えた。

この、金に物を言わせる態度が怨念を招いていると言う事がわからないもんなのかね……

ゴールドデンウィーク最終日、俺はようやく一日休める日を作る事ができ、カナメと遊ぶ約束をしていた。

遊ぶと言ってもこの近辺だとカラオケに行くかファーストフード店や

ファミレスで駄弁る位しか出来ないのだが。

今、学校最寄りの駅から三駅ほど離れた街で待ち合わせをしている。

この街は俺達が住んでいる所と比べるとだいぶ栄えている所だ。

カナメ曰く、ここまで来ないと画材屋が無いとの事なので、折角だからここまで来る事になった。

ここまで来ればゲームセンターなんかもあるし、遊ぶには良いだろうと思ったのも有る。

時計を気にしながら改札前で待つ事暫く。

カナメも大概待ち合わせ時間よりも早めに来るタイプではあるのだが、今日に限って俺が時間の目測を誤って三十分も早く来てしまったのだ。

待ち合わせ時間十五分前となった辺りで、改札口から知った顔が出てきた。

カナメが到着した訳なのだが、その姿を見て俺は思わず表情を固めてしまった。

何故かという、ゴールデンウィークが始まる前には憑いていなかった霊的な物がカナメに憑いていたからだ。

それがどんな物かというと、メタリックなボディで背中に緑色の石をびっしりと敷き詰めたカエル。

当然カナメはその存在に気付いていない。

「あ、勤、待たせちゃった？」

「あ、ああ、多少は待ったけど……」

そんなやりとりをしながら俺がカナメの顔とカエルを交互に見ていると、カエルがカナメの頭の上で会釈をした。

この様子だと悪い憑きものでは無いだろうし、気にしなくても良いかな？ でも気になる……

俺の心中を全く察していない様子のカナメは、早速画材屋のある方へと足を向ける。

画材屋までの道のりで、カナメがこんな事を言った。

「そう言えば、石の販売イベントに行ってきたんだよね。

買った石を少し持ってきたから、後で勤にも見せてあげる」

「おう、楽しみにしてるわ」

そこで会話が途切れた。

視線を足下に落とし、時折唇を尖らせているカナメ。

多分、画材屋で何を買うかのリストを頭の中に作っているのだろう。

数歩分静かにしていると、今度はカナメの頭の上のカエルが口を開いた。

「あたしね、ご主人様を買った石に付いてきたの。」

勤様はあたしの事が見えるみたいだけど、ご主人様には内緒にして欲しいケコ」

俺は黙って頷く。

このカエルが言っているご主人様というのは、カナメの事だろう。

しかし、カエル系の霊となると、良く聞くのは銭ガエルという、お金を貯める習性のあるカエルだ。

けれどもこのカエルはどう見てもお金を貯めるようなカエルには見えない。

一体どういう物なのだろう？ その言葉を念にしてカエルに向けると、こう答えが返ってきた。

「あたしは宝石ガエルって言う種類のカエルなのね。」

お金じゃ無くて宝石を食べるケコ。

でもね、あたしがご主人様に付いてきたのは宝石が食べたいからじゃ無いケコよ。

何となく、ご主人様に付いていてあげないといけない気がしたの」

なるほど。このカエルはカナメを守るつもりで憑いてきたのか。

それなら特に警戒する必要は無い。

俺はカエルに、これから宜しく。と念を送った。

画材屋で用事を済ませた俺達は、近くのアミレスでお昼ご飯を食べていた。

「僕飲み物取ってくるね。」

勤は何が飲みたい？」

「俺？　じゃあアイスコーヒーよろしく」

カナメがドリンクバーに行って暫く待つと、コップを二つ持って帰ってきた。

片方は確かにコーヒーなのだが、もう片方はなんか得体の知れない色をしている。

「はい、コーヒー」

「お、おう」

差し出されたコーヒーを受け取りながら、俺は訊ねた。

「あのさ、お前の分の飲み物何？」

変な色してるんだけど」

するとカナメは至って普通にこう答える。

「お茶一、メロンソーダー、コーラ一で混ぜたやつ。飲んでみる？」

「嫌な予感しかないから遠慮しとく」

そうこうしている間にも料理も運ばれてきて、俺達はお腹を満たしたのだった。

食後、未だドリンクバーを頼りにファミレスに居座っている訳なのだが、食べ終わった食器を脇に避け、カナメが買ってきたという石を見せて貰っていた。

綺麗な形の原石や、輝くように磨かれた宝石など、色々有る。

俺も仕事柄原石……と言うよりはパワーストーンのお世話になる事が多いのだが、実は石にはこんな話がある。

笑いと泣き石。

笑いと泣き石というのは持ち主に福を呼び寄せてくれる物なのだが、泣き石というのは持ち主に不幸を呼ぶと言われている。

泣き石の例として有名なのは、ブルーホープというブルーダイヤだ。

ブルーホープは幾多の人の手に渡っては不幸を招いたと言い伝えられる石で、今は誰の所蔵でも無く、博物館に置くことで災いを避けてい

る。

そう言う謂われがあると、カナメが買ってきた石はどうなのだろう
と、思ってしまう訳なのだが、一瞬判別が付かなかった。

「これ、ちよっと手に取って見て良いか？」

「うん。良いよ」

カナメの許可を得て石を一つずつ確認していくと、どうやら石は皆
笑い石のようだ。

ただ、普通の笑い石とは違う点がある。

この石達は不当な扱いを受けたのか元からの性質からなのかは解ら
ないが、皆拗ねているのだ。

この石をカナメの手元に置かせておいて大丈夫なのか思わず悩む。
すると、それに気がついたのか、カエルがテーブルの上に降りたって石
を優しく撫で始めた。

「大丈夫ケコよ。ご主人様はきっと、大事に大事にしてくれるケコよ」

カエルが石に言葉を掛けると、拗ねていた石達から喜びのオーラを
感じられるようになってきた。

なるほど、このカエルはこんな事も出来るのか。

このことを知った俺は今後こっそり、浄化しても疲れが取れない石を、

このカエルに癒やして貰おうなどと思ったのだった。

第三章 儚い幻

ゴールデンウィークも過ぎた頃に、俺達の学校の文化祭について話題が上がった。

中学の頃は文化祭は秋にやっていたので、梅雨の時期に文化祭をやるというのは意外だった。

文化祭の出し物はどうするかというクラス会議が開かれる訳なのだが、出てくる意見が飲食店ばかり。

確かにそれなら事前準備もそんなにしなくて良いだろうし、目立ちたがり屋な奴なんかはウェイターやウェイトレスをやって目立つことも出来る。

結局、俺のクラスは駄菓子とお茶やコーヒーを提供する駄菓子喫茶なる物をやる事になった。

しかし喫茶なあ……聞いた話によると音楽科のクラスなんかが音楽喫茶を開くらしいし、そっちに客が取られるんじゃないかとは思うんだがね。

やや不満はあるが、俺も特にやりたいことは無いしで文句は言えない。

釈然としないままクラス会議を聞いていたら、誰が接客をするのかという話になってきた。

部活の出し物の都合でクラスの方には顔を出せない人も居るので、そのすり合わせだろう。

俺は裏方に回りたいなと思いつつ、カナメがどうしているかこっそりと見てみると、我関せずと言った顔で視線を泳がせている。

ところが突然こんな事を言い出す奴が。

「柏原君にウェイターやって貰いましょう！」

占いも得意みたいだから、希望者には一回いくらで占いもやって貰ったかどうかかな？」

その言葉にカナメが身を固める。

まさか自分に矛先が向くとは思っていなかった様で、戸惑いの表情が浮かんでいる。

カナメの様子に他のクラスメイトは一切気付く様子も無く、話を進めていく。

カナメがウェイターをすることが既に前提になってしまった辺りで、発案者がカナメに占いの料金を訊ねる。

すると、カナメは気まずそうに、小声でこう答えた。

「あの、僕は漫研の店番をしないといけなから、クラスの出し物には出られそうに無くて……」

すると今度は、漫研の休憩時間が有るだろうから、その時にクラスの出し物に顔を出して接客をしろと言いつ出した。

流石にこれは俺がカチンときた。

「お前等カナメのこと何だと思ってるんだよ！
文化部は部活の出し物があるからクラスの方には出なくて良いって事になってるだろ」

思わずきつい口調で吐き捨てると、他の女子がこう返してくる。

「寺原君はそう思ってるかもしれないけど、柏原君はやりたいかもしれないじゃん？」

ねえ、柏原君、やりたいよね？」

「え？ 僕、今さっき出られないって言った気がするんだけど？」

役職を押しつけてくる女子の言葉に、先ほどまで怯えていたカナメが意外とするりと反論した。

しかしその言葉にも女子陣が折れない。

男子の方はそろそろ勘弁してやれよと言う雰囲気なのだが、女子達はその間に占いをやらせたいのだろうか。

最終的にどうなったかというと、

「うん…… 漫研の会長にお願いして、午前中一時間だけはこっちに出られるようにする。」

それで良い？」

と、カナメが折れる結果となった。

そして文化祭当日。

俺も駄菓子喫茶のウェイターを任されてしまっただけ接客をしているのだが、これがなかなか面倒くさい。

始めの一時間だけと言う条件でウェイターをやっているカナメは、洋裁が得意な親が居ると言うクラスメイトが用意したウェイター服に身を包んで、澄ました顔をしている。

事前に『接客は笑顔！ 笑顔で！』と重ねて言われていたのだが、カナメ曰く、自分の笑った顔が好きでは無いのだという。だから作り笑いはしていない。

俺は家の仕事の都合で愛想を振りまくのには慣れているので、営業スマイルはばっちりだ。

ふと、女子生徒の話し声がテーブル席から聞こえてくる。

あの人優しそうでイケメン。でも、あっちの人もクールな感じでカッコいいよ。等と言う内容だ。

誰のことを話しているのだろうなどと悩む必要は無かった。

何故なら今この時間、ウェイターをやっているのは俺とカナメだけだからだ。

文化祭が始まってから、時計の長針が一周した頃、カナメが取り纏め役の女子に、そろそろ漫研の方に移動するという事を伝え、着替えを持って教室から出て行った。

それからまた暫く経って、俺もウェイターの仕事が終わったので校内をぶらついていた。

しかし、本当に飲食店ばっかだな。飲食店じゃ無いのは文化部と美術科だけじゃ無いか。

一人で延々食べ歩きするのもつまらないので、生物部のハムスターと遊んだり演劇部の公演を観たりしていた訳なのだが、ふとある事を思い出した。

そう言えば、カナメが居るはずの漫研にまだ行ってないな。

文化祭合わせて会誌も作ると言っていたし、漫研内で、普段内気な力

ナメがどんな振る舞いをしているのかも気になる。

そんなことを考えている内に、俺の脚は漫研が借りている会議室へと向かっていた。

会議室に付くと、地味な雰囲気的男子生徒二人組とすれ違った。

すれ違いざまにこんな会話が聞こえてくる。

「漫研ってあんな美人居るの？」

俺、入ろうかな」

「マジヤバイよな。」

あの子は三次元だけど許せる」

一体どんな女子生徒が居るんだ？

二次元至上主義者に三次元でも許せると言わしめる程の美人、そんな話はカナメから聞いた事が無い。

でも、カナメ自体余り漫研の部員の話をしてないしな……

少しの疑問を抱えたまま会議室に入ると、数人の女子生徒がメイド服を着て接客をしていた。

確かに、あんな服を着られたら一割増しでは見えるな。

そう思いながら女子生徒の顔を見てみると、先ほど噂になっていたと

おぼしき子が居た。

丁寧に机の上に並べられた会誌の説明をし、購入希望者が居れば手際よく会計もする。

少し伏し目がちで澄ました顔をしているのだが、今までの会誌の感想を言われた時にはふわりとした笑みを見せたりもしている。

少し頼りなさげな瞳をした彼女の姿に、俺は射貫かれたような気がした。

中学の頃から数回経験はしているが、これは恋って奴だ。

俺はあの子に一目惚れしてしまった様だった。

近づいて話をしたい。入学してから今までの会誌は全部読んでは、会誌の話だって出来るぞ。

そう思っても脚が竦んで動かない。

勇気を、今こそ勇気を！

そう自分に言い聞かせ、ようやく一歩踏み出した所で彼女の方から声を掛けてきた。

「あ、勤じゃん。いらっしやい」

「え？」

聞き覚えのある声だ。

「あの……もしかして、カナメ？」

「うん、そうだけど？」

「やっぱ女装って引いちゃう？」

申し訳なさそうな顔をしている今のカナメは、どう見ても男には見えない。

敢えて言うなら胸が極端に平らだなとは思うが、文化祭と言うことで特別に許可されている化粧が施された顔は、まるっきり女子の物だった。

どうしよう。引いている訳でも無いし気持ち悪い訳でも無く、心底似合っていると思うのだが、素直にそう言うとか化しているように、悪くすれば嫌味に聞こえるだろう。

だから俺は、上手く動かない頭を働かせ、おどおどしているカナメにこう言った。

「大丈夫、違和感ない」

するとカナメはほっとした表情をした後、口を尖らせる。

「じゃあ、勤と一緒に遊ぶ時、僕が女装してても恥ずかしくないって言える？」

その言葉と表情に、もう一本矢が刺さった。

「おうよ。」

なにお前、俺と遊ぶ時女装したいのか？」

向こうが茶化してくるなら、こっちも茶化し返さないと持たない。そんな事をしていたら、なんだか段々女装したカナメと一緒に歩いてみたい気もしてきた。

駄目だよ、なに考えてんだよ俺は。こいつは男だぞ？

カナメは女装した自分を見て引くかと訊いてきたけれど、俺の今の心境をこいつに聞かせたら、絶対俺の方が引かれるわ……